

## 研究を通じて海外とつながる

### －外から日本をながめる－

第2回目は前回と逆の視点を取り、海外の学会に参加することで見えてきた日本というテーマでお話をさせていただきます。まずは日本を出て海外の学会に参加すると、これまで当たり前のことと生きてきた日本型のキャリア形成や就職活動は、国外からみると他にないほど特徴的なものであることが分かります。たとえば、私達が大学生を対象としてキャリア教育やキャリア選択について検討するときは、卒業見込みで行う新卒一括採用を前提としたうえでデータを解釈し支援について考えます。しかしこのニッポン型の新卒一括採用は、海外の研究者にはとても不思議なシステムに映るようです。なぜ学生は卒業する随分と前から一斉に活動を始めるのか？なぜ3月に情報公開、6月に選考開始などと細かなスケジュールがあるのか？などよく質問をされます。そうした時に、このシステムの背景には新卒採用の長い歴史があり、学業を優先させたい大学側と採用に力を入れる企業側の綱引きが続いていることなどを説明すると日本の就活事情に関心をもってもらえるようです。それと同時に、自己効力、キャリア選択、性役割など他国と共通の指標をもちいて得た結果も、こうした社会的文脈を加味しながら解釈し、情報発信することの大切さを改めて感じています。

海外の学会に参加するなかで、海外の研究者に映る日本と私達が理解しているところの日本には、意外と開きがあることも知りました。たとえば、NEETは、もともとイギリスで使われるようになった呼び方でイギリスの若者層に特徴的な現象であることが共通理解だと私は思っていました。しかしサビカスの講演では、イギリスではなく日本の若者とNEETを関連づけて話が展開されていました。これはNEETやひきこもりを扱う日本の研究や報道が増えたからかもしれませんが、国外に出てはじめて知った海外の研究者の目に映る日本の姿でした。

また、私は男女共同参画やジェンダーの問題にも関心があり、他国の研究発表を聴くことがありますが、何を平等としてどう働き掛けを行うかは国や地域によって様々です。私達の社会では、男性と女性の働き方や地位の差を縮めて

いくことが平等であるとの前提で、男女の垣根をなくしていくための努力をしています。けれども国や宗教によっては、そうした男女の混同はあってはならず、タブー視されているところもあります。しかしそうした国にはその国なりの男女平等があり、その達成にむけた働き掛けがあるわけです。このように、海外から日本を眺めたり、他国と日本を比較することによって、事象を相対化して考える視点が鍛えられるように思います。

(大阪教育大学 安達智子)